

## 生態学的日本史への序説

川喜田 二郎\*

### 1. 事のはじまり

ここに記す、エッセイとも物語りともつかないお話は、もちろん学術論文などではさらさらしない。しかし、遠からず私は、こんなテーマについて論文を書くはめになるような気がする。それはひとつの予感だ。

それにしても、なぜ私は「生態学的日本史」などという奇妙なテーマを思いついたのだろうか。味気ないようなことだが、まづはじめに時系列を逆転させて、今抱いている結論的な予想を語ろう。

今後環境問題が深く凝視<sup>みつ</sup>められてゆくと共に、エコシステム（生態系）という概念は、ますます重要性を勝ち得てゆくと思う。ところで、完全に閉鎖的で再生産的なエコシステムというものは、恐らくどこにも存しまい。地球表面全体が最もそれに近かろうが、熱収支や生物の進化史を考えるだけでも、空間的・時間的にダイナミックなエコシステムというべきであろう。にも関わらず、比較的安定した閉鎖系として、たとえばひとつの植物分布帯とか湖水とかを扱うことは、少くも環境科学の見地からは、ますます大切になってゆくだろう。エネルギーや物質の循環の上で、比較的安定した系であることは、環境保全の見地から大切であるにちがいない。

こう考えるとき、地域性を帯びた生態系を、まづパターンとして捉えることが大切になる。そしてそのパターンが相当の永さにわたって歴史の風雪に耐えて存続したということ、そのこと自体が非常な重みを持っている。自然科学者はとかく機能論的に分析的に物事を解明することばかりを「科学的」といいたがる。だが、たとえばタイガと呼ばれる北方針葉樹林帯を考えて、そこにおける動植物と大地が生みだしているエコシステムは、物質・エネルギー循環の一切のメカニズムを解明するまでは、パターンとして認めてはいけないのだろうか。

第一、タイガのエコシステムを、詳しく機能論的に、しかも構造論的に明らかにする日を待っていたら、それだけで何十年・何百年かかるかもしれない。しかもそのあげくには「パターン」はどこかに蒸発してしまうかもしれない。そのためばかり、というわけではないが、われわれは、機能分析的な方法だけを「科学的に権威のある」唯一の道だ、などと、ゆめゆめ偏狭になってはいけない。他の方法として、少くも「歴史的」方法と「比較」による方法は、今まで充分な実績をあげている。「パターンとは何ぞや？」などという哲学的論議にふけることは、ここでは野暮な話だから、省いてしまおう。

---

\* 歴史・人類学系

ともかく永く歴史の風雪に耐えた生態系パターンというものがある。そして、持続したこと自体が、パターンを再生産・持続させるだけの、磨かれた再生産性を自然界のメカニズムの中に持っていた証左でもあるのだ。ところで、ここで問題にしているエコシステムの中には、当然大きな要素として人間どもがいる。そして、その人間たちと他の自然とを媒介するものとして「文化」を持っている。人間社会と文化を「自然」の一部として考慮するようなエコロジーのみが、今日環境科学的には最もリアルなものだろう。

そこで、人間と文化を含んだ生態系パターンを語るとして、足もとの日本列島をどう理解すればよいのか。それを捉えないと、日本の環境問題を理解するにも、大切な支柱のひとつを失うことになる。近代産業社会が公害や環境破壊をもたらしたとして、近代産業社会なるものは、発祥地の西歐にしたところで、たかだか2世紀、日本などは1世紀そこそこだ。まだ歴史の風雪に耐えた、などといえるしろものではない。

ここに至って忽然と、次のような事に気づくだろう。近代化以前の生活様式などというのは、学者はいざ知らず、一般人にとってはどうでもよい昔語りなのだ。若者に至っては懐古趣味の対象だとして片づけるかもしれない。ところが、近代化以前の生活様式の方が、少なくとも地域的にもっとハッキリしたパターンがあった。そしてその生活様式の根もとには、それに対応した環境があったわけだ。だから、生活様式のパターンという捉え方を、もう一步深めて、生態系パターンとして捉え直す必要がある。その伝統的パターンの上に近代化というものが襲いかかった。その結果伝統的パターンが完全に崩れるのかどうか。

完全に崩れるのなら、近代化は代るべき新しいパターンを創造しつつあるのか。それともパターンなどというのは、崩れ去りつつある一方なのか。また、パターンなどというのは、今後は必要でないのかどうか。少なくとも私の眼には、何らかのパターンは人間にとって必須なのに、現代人はその必要性についてすらボンヤリとしか自覚してないように見える。だから、近代化の惹きおこした環境問題の本質を明らかにして対策を打つには、まづ近代化以前の生態系パターンを、もっと明確にする必要がある。その伝統的パターンに対して、近代化はそれをどのように改変しつつあるのかを、問わなければならない。それは近代化に賛成か反対かを越えた課題なのである。

こう気がつけば、江戸時代のエコロジカルな研究も重要だし、縄文時代末期や今日の東南アジアの「焼畑・狩猟」的エコシステムの研究も、同様に重要だと判ってくるだろう。

だが、私自身のこういった方向への関心をふり返ってみると、事のはじまりはずいぶん昔に遡ることに気づいたのだった。

## 2. 私のさまよい

黒潮を横切って小笠原や硫黄列島、更には熱帯マイクロネシアの島々に接したこと。あるいは東満山地や北満の大興安嶺に学術探検を行なったこと。パターンの異なるこういった大地に触れたことが、

エコロジカルな見方の基盤を培ったことは争われない。

そして私の大学の卒論のテーマは、東北アジアの開拓問題だった。開拓者というものは殊の外、自分の生まれ育ったエコシステム（文化を含む）と異なる大地に直面して、エコシステムの問題を身につまされて考えるのである。そこで私は終戦と共に、その開拓者の立場に自分を置いてみようと、伯耆大山の原野で農場の現場監督をやってみた。アメリカ地理学界の大物でウイルソン大統領のブレーンもしたボウマンの著書に惹かれたのも、彼が、パイオニア・フリンジの問題を好んで扱ったからだ。

火山々麓の火山灰土壤に覆われた台地地帯。それを私は土壤の日本的土名に従って、クロボク地帯と呼ぼう。クロボク地帯を、単に学者として「外から」見るのではなく、営農を通して生きようとする努力の中で研究したこと。それが私に大きな開眼をもたらした。そしてクロボク地帯がなぜ開けないかという根底に、日本文化のパターンがあることを知った。もし無住の日本列島に欧米人が住みついたら、ここは一等地として扱われたろう。日本文化を培った環境はこれと異ったものであり、クロボク地帯はいわば「異端的」な大地だったのである。

それから私は、もっと「正統的」な日本の農村、特に関西や北陸の水田農村に触れた。日本列島のエコシステム・パターンが、よりよく見えてきた。

次にヒマラヤがやってきた。中部ネパールを研究対象に選んだのだが、そのエコシステム・パターンが見えてくるのには、約20年かかっている。結論的にいおう。この地上最大の垂直構造を持つ地域について、まづいちばん早くはっきり捉えられたのは、植生の垂直分布構造だった。だが、文化を含み人間を含む営みが加わった現実のトータルなエコシステムについては、なかなかそのパターンが深く見えなかった。現実が複雑すぎて、パターンがみえないのである。

そのパターンの発見の上で、やはり基本的に大切だったのは、土地利用のパターンである。ここから構築していった、結局は主な生態系パターンとして、少なくとも4つがネパールに見いだされる。(1)ひとつは低所を占めるヒンズー文明の地帯。(2)他は、高所を占めるチベット文明の地帯。(3)そして両者の中間高度の山地帯を占める重層文化の地帯。(4)最後に、首府のあるネパール盆地やパンチガオンという奥地に見いだした、都市国家的な亜文明の島である。なおもうひとつ加えるなら、これらすべてを覆いつつある、「近代化」という波である。しかしこれはまだ成熟したパターンには至っていない。

この際、ヒンズー文明とかチベット文明とっておいたのは、単に文化のパターンという意味だけに留めず、環境をも含む生態系パターンの意味と御理解頂きたい。重層文化といったのは、土着の素朴な文化（またはトライバルな文化）と、ヒンズーもしくはチベット文明の文化とが、重層的に組みあわされたものである。日本でいえば、神仏混淆とか和洋折衷とかは、この重層文化の状態を指すのである。日本の基本的性格のひとつは、重層文化の国だということである。

このヒマラヤ研究で、のっぴきならずでてきた問題。そして非常に重要で興味深い問題。それは、

文化の発展段階である。これは歴史ということとは本質的に別のことである。植生でいえば、喬木層・灌木層・草本層のちがいのようなものである。けれどもまた、発展段階の低い方から高い方へと変わりやすい点で、歴史的に見ることもできる。

歴史的に見た場合、私は次のような発展系列に気づいた。文化を素朴と文明に2大別した場合、区別の指標はいろいろ考えられる。しかし重要な指標は、人と人とお互いを個性ある人間として認めあったヤリトリを重視しているか否かではないか。このような個人接触が中心的文化を素朴文化といおう。それは必然的に小集団たらざるを得なくなる。このような小集団には多種多様なものがあるけれど、包括的に多様な社会機能を満足させている地縁的な小集団がコミュニティである。ところが文明になると、この小集団レベルの他に人間を「人・物・金」の1種として物的に処理する「システム・レベル」が登場する。他方それと均りあいを取ろうとするかのように、個我の目覚めがおこり「個人レベル」も出現するのである。結局社会が3レベルに分化する。個人・小集団・システム、の3レベルである。これが文明と呼ばれる段階だ。

ところが、素朴と文明という2段階の他に、実際には両者の中間段階のパターンが、もう2種ある。ひとつが、都市国家を代表例とする亜文明のパターン。もうひとつが既にのべた重層文化のパターンなのだ。前者は素朴文化が主に内因的に発展的解消をとげた場合に生ずる。これに反し、中国文明の衝撃を受けた日本とか、ローマ文明の衝撃を受けた西欧とかは、後者の重層文化パターンを作ったのである。外因が重要な役割を演じている。ネパールでいえば、ネパール盆地やパンチガオンのそれは亜文明パターンであり、中間山地の諸民族は重層文化の民なのである。

ヒマラヤ研究は、文明の比較生態学的研究といった視点について、私を開眼させた。たとえばヒマラヤ主嶺以北のチベット人の1寒村についてさえ、そこにチベット文明の影が縮小版で宿されているのである。彼らの小さなオアシス耕地の縁に生える雑草の刈り取り方にさえ、チベット文明が育てたエコロジカルな叡智が宿っているのである。彼らが懐に常に携行する木の茶碗ひとつ取っても、そこにチベット文明のエコロジーの全縮図が宿っているのである。全く驚くべきことだ。

したがって、逆にヒンズー文明の地帯で、ヒンズー教の儀礼に際して彼らがしばしばミルクで炊いたお米を使うのを見たとき、そこに水田稲作と牧畜とを結合して何十世紀に及んだヒンズー教徒のエコロジーを垣間見たとて、不思議なことではない。儀礼の話だけではない。価値観を含め宗教を含めたエコロジーまで構想しないと、エコロジーも本物にはなるまい。

### 3. ヒマラヤへの技術協力から

生態系への認識を踏まえて、私はヒマラヤ奥地の山村に対する技術協力を乗りだした。数かずの失敗をも抱えながら、大局的には「ああ、我勝てり」であった。住民がこぞってこの技術協力を支持し、それに参画した。それはひとえに、現地のエコシステムに則り、伝統的なエコシステムの崩壊を更生させる方向のものであったからだ。エコシステムに則るイノベーション、それは殆んど

「天命に則る」技術協力と同義語なのである。

だが、現地のエコシステムの何たるかを知らない某国技術協力組織の林業専門家から、ネパール政府への中傷が行われた。それに反論し闘う中から、私はまた幾つかの教訓を学んだ。たとえば、専門家といふ技術者というものが、いかにステレオタイプ化した硬さを持ち、現地の実態把握力特にエコロジカルな把握力を欠いているか。住民がいかに賢明で、伝統的なエスノサイエンスがいかに役立つものか。中央・権力・都市指向の価値観が、いかに僻地農村の開発をも環境保全をも害しつつあるか、等々。

ところが、ふと足もとの日本のことを考えてみると、事態はヒマラヤの場合と同じパターンの中を低迷しているように思えてきた。そのひとつとして、ネパールどころか、日本についてさえ、伝統的な生態系パターンが、いまだに取りだされていないことに気づく。そこで私の関心は、久しぶりに日本列島に回帰しつつあるようだ。

#### 4. 生態学的日本史

現在私の抱いているイメージを、ズバリのべてみよう。

岩宿の発見以来、日本に旧石器時代人がいたことは疑い得ない。ところで世界的に、旧石器人は採集・狩猟の民だった。別言すれば源氏の陸兵ともいうべきエコシステムで暮らしていた。ところが、「中石器時代」の初頭、つまりヨーロッパの水河時代が終わる頃から、少なくともユーラシア大陸全体にわたって、「水界民」が急激に登場してきたのである。河や湖や海沿いの遺跡・遺物が豊富に現われる。明らかに舟を駆使するようになったのだ。

驚くべきことは、中石器時代がエコロジカルには水界民的生活様式の幕開けであることを、考古学を専門とする人びとの中にさえ自覚していない人の多いことである。更に驚くべきことは、「水界民」という用語さえ私が苦辛して作らねばならなかったことだ。当時の彼らにとっては、海は遠洋まで行けず、沿海が大切だった。更に、海に対する川の重要性は比重が大きかった。その上皮肉なことに、舟が小さく軽かったからこそ、今日では想像もつかないぐらい大陸内部や源流まで入りこめたのだ。更に分水嶺ですら舟を担いで越えられた。今日でもボルネオの山の上の部落にまで舟がみられるのは、この伝統上にあるからではないか。それでも舟は舟。人力運搬より1ケタ上の輸送力があつたらう。

だから彼らを「海洋民」とは呼べない。さりとて「漁民」というのも誤り。なぜなら水界の重要性を魚貝類だけとするのは、現代産業社会の浅ましい経済偏重史観で歴史を歪めることになるからだ。水界は交通輸送にも、更にはリクリエーションや宗教にすら関わっていたにちがいない。だから「水民」と呼びたいが、これでは「睡眠」と混同する。そこで「水界民」と呼ぶことにした。

カール・サウアーや中尾佐助氏の見解を柱とし、これに私の見解を加えると、事態は次のように推移したらしい。

中石器時代の水界民は、空間利用のエコロジーを大巾に変えた。こうして旧石器時代からの「山幸彦」と、新しい「海幸彦」とが、以後何十世紀を空間を水平的に住みわけてエコシステムを形成するのである。その末期に、東南アジア辺で水界民の半定住ないし定住村落から、イモ類などを1本植えする「根栽農業」がおこった。これが湿潤熱帯を中心に世界中に拡がっていった。この農業が乾燥あるいは寒冷な辺地に近づいたところで、「サバンナ型夏作雑穀農業」の伝統と、「地中海型麦作農牧」の伝統を派生する。これら2つの伝統も、生まれ故郷から世界中に伝播するのである。

稲作はサバンナ型の伝統が再び湿潤熱帯にぶつかったところで「湿地型雑穀」として開発された。つまりアフリカのサバンナ南縁（オリザ・グラベリマ）とアッサム辺（オリザ・サティバ）とである。

しかし都市文明への主流になったのは、地中海型麦作農牧の伝統だった。恐らく野生麦と牛・羊とのエコロジカル・コンプレックス上に生まれたため、最初から大家畜を手に入れたからだろう。そのため畜力利用で労働生産性をあげられ、その社会的余剰が都市発生の背景となったのではないか。それに乾燥地帯の灌漑農業という集約性の利点も加わり、周知のようにシュメール以来の西アジアにおける「亜文明」の発生となったのである。これにヒッタイト帝国末の鉄器革命が加わり、最初の文明、すなわちペルシャ帝国とゾロアスター教となったわけだ。

このように、半農半牧的土地利用の上に都市革命（チャイルド）が加わったエコシステムが文明の主流になったため、今日に至るまで日本の位置づけが混乱に混乱を重ねているのではないか。

日本には旧石器山幸彦エコシステムに加え、中石器海幸彦エコシステムも入ってきた。おくて、「水界民プラス根栽農業」も入ったろう。サトイモやヤマノイモが神事にも残っているから。次いで縄文末期にはサバンナ型夏作雑穀の伝統も入り、山幸彦の伝統は「焼畑プラス狩猟」エコシステムに変わる。この伝統は宮本常一氏によれば実に戦国時代まで脈々と続いた。今なお山住み型の村となって南日本や中部日本の山腹占拠型集落として見られる。

だが間もなく弥生時代人の「水界プラス稲作」型エコシステムが入り、特に日本の西半を占める。谷間を中心に内陸に入りこんだ。にも拘わらず、日本文化の主流派になったのは、古墳時代初期にきた第2波の稲作民ではなかろうか。

この主流派を、土地利用パターンを中核としたエコシステムの見地から見ると、大きな特色に気づくのである。たとえば日本の有名な神宮は殆んど、ヒンターランドで大規模な水田地帯を持ち、他面、川や静かな海を前面に持っている。弥生人と異なるのは、山沿いのけちなカケ流し水田でなく、相当な土木力で湿地を干拓できたことである。豊草原の水穂の国というイメージにピッタリ。その背後に鉄器革命の本格的享受が窺われる。宇佐八幡、出雲大社、気比神宮、難波宮、伊勢神宮、熱田神宮、鹿島・香取神宮、いずれもそんな場所である。内陸に位置する石上神宮や京都の加茂神社も、川を遡ってターミナルステーションとなった、同様な立地にあたる。つまり舟による水路交通がいかに重要だったかである。

だからこの主流派にとっては、南鮮（稲作に有利）も日本も一衣帯水だったのである。百済と大和とは、そんなに違った国ではなかった。だから双方の人間が相手国へ行って、平気な顔でV. I. P.でおさまれたのである。このようなエコシステムと全く異なる大陸中国のエコシステムに発達した文明と政治権力が朝鮮半島を南下してきて、遂に任那は海中につき落とされたのであった。

「水界プラス稲作」のエコシステムで日本の国土をより多く水の世界から捉えていた日本国民も、時代を降るに従ってだんだん源氏の陸兵的に国土を見るように変わったのである。それでも江戸時代はまだ川舟による流域システムだった。明治に岡蒸気がこれらの川を横切って走りだすと、川は水の収奪場とゴミ捨て場になった。そして再び今日、川や海が汚れたと騒ぎ、国土庁の三全総で流域圏がどうのこうのといっている。

だが動かぬ証拠がある。そんなことを論じている日本人はしょっちゅうスシを食べているではないか。つまり米粒の上に魚貝をのせて食べている。日本は「スシ生態系」の国なのだ。大陸的・農牧的文明にかぶれて視点まで誤ると、日本列島のありのままを見誤ることになりはしないか。